
7月7日 ～千歳鷺介《ちとせしゅうすけ》編～

黒夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7月7日 ちとせしゅうすけ 千歳鷺介編

【Nコード】

N6833U

【作者名】

黒夜叉

【あらすじ】

俺たちに翼はないの七夕短編小説です。知らない方でも読めるように書いたので、いろんな人が読んでくれるとうれしいです。

えーと、まー、どーでもいいことなんですけどー。

七夕って知ってますよね？

そう、年に一回彦星様と織姫様が出会ってやつです。

実はこれ元々は中国の節句らしくて日本には奈良時代に伝わったらしいですが、今ののように短冊に願い事を書いて竹に飾るってことが広がったのはどうやら江戸時代のようにです。

街中でもよく店頭とかに置かれていますよね。

それを見ると今年も七夕が来たんだなーって実感させられます。

でも、何も願い事を書くってことだけが七夕ではないと思うんですよ。

こう星空を見てひと時の安らぎを感じることも七夕の楽しみ方じゃないんでしょうか。

ね、ほら、見てください？

どーです。綺麗でしょ、この満天の星空。

もう手を伸ばせば届きそうなほどでしょ。

ええ、さすがです。

柳原から少し離れたところにある星空が綺麗に見えることで有名な八木山。

素晴らしい。

街中では見ることでできないようなかわいらしい光を放っている星もここなら見ることもできます。

光の大きさや色はそれぞれ異なりますけど、それが集まることによつてすばらしい芸術作品を作り出しています。

いやあ、星空って本当にいいものですね。

あつ、でもそれよりも綺麗なものっていったら俺のすぐ隣にいるんですよ。

えっ？何かって？

そういや、紹介がまだでしたね。

では、そちらの方に視線を移してみましようか。

「うわー、綺麗………」

そう、綺麗と言ったらもちろん俺のバイト先の『アレキサンダー』の専属トレーナー兼彼女の玉泉日和子さんです！

いやー、いつもバイト先や学校で見ている制服姿とは違い、今日は私服姿なんでもいつもとは違う印象を与えてくれます。

もちろんいい意味ですが。

それに、最近何かと忙しかったもので………。

だから、あまりこうやって二人で一緒になかなかいらなかったの
でそうだったことも関係しているのか、今日の俺は日和子さんがい
つもより数段輝いて見えます。

「どうしたんですか鷺介さん？こっちをじっと見て」

彼女はこちらの視線に気が付いて俺の顔を不思議そうに覗き込んで
きました。

「いえ、別に特になってわけじゃないですけど………。今日も
綺麗だなーと思ひまして。日和子さんが」

「！？い、いきなり何を言い出すんですか！鷺介さん、馬鹿じゃな
いですか！」

日和子さんは恥ずかしさのせいか顔をそむけて向こうの方に行って

しまいました。

あはは、照れちゃって。かわいいなーもう。

「って、ちょ、待って！置いて行かないで！」

「鷺介さん、馬鹿じゃないですか！」

「二回も言われた！」

~~~~~

「本当に綺麗ですね鷺介さん」

「ええ、全くだす」

本当に綺麗です、ってか綺麗すぎます星空もですがあなたも。

先ほどよりも夜がだいぶ更けてきて、さらにいつそう星の輝きが目立つようになりました。

そして、それを見つめる日和子さんも微かな光に照らされて神秘的な雰囲気漂わせています。

ああ、もう少しここにいたいなー。

しかし、時間も時間なだけにそろそろ帰らないといけません。

日和子さんの親御さんが心配されますからね。

かといって、このままで帰るつもりありません。

実は今日はこのワタクシ千歳鷺介、日和子さんのためにあるものを買ってきたのです！

これをプレゼントするためにここに連れてきたといっても過言ではありません。

聞いた話、七夕というのは台湾ではどうやらバレンタインデーのよ

うに男女がプレゼントを交換する日のようです。

今回はそれを真似てみました。

あつ、最初に言っておきますがダイヤの指輪なんて高価なものではありませんよ。

まだ結婚できるような状態ではありませんし、何より金銭的な面で・  
・・・・・

で、でも、これはこれで愛しの彼女のために頑張りましたよ！

ええ、本当です！

「鷺介さん」

ふいに日和子さんが私を呼ぶ声が聞こえてきました。

「はい。なんでしょうか」

「こないいいものを見させていただけでうれしいです。本当にありがとうございます」

にっこりと微笑んで心底嬉しそうに話す日和子さん。

や、ヤバすぎです。あまりにもかわいすぎます。

俺の理性のライフエナジーがかなり削られてしまいました。

恐るべき日和子さん！

でも、このタイミングでしょうね。

例のものを渡すのは。

俺はグッと熱く拳を固めました。

「日和子さん」

「？何ですか」

「実は渡したいものがあるんです」

「えっ？」

俺はポケットに手を持っていき、用意していたものを取り出しました。

そして、彼女に手渡します。

「あ、ありがとうございます。えーと、その……開けてみてもいいですか？」

「ええ、もちろん」

そう言って日和子さんは包みのふたをしているシールを外し、中身を確認しました。

「あっ……………」

日和子さんは心底驚いた顔をしていました。

ふふふっ、サプライズ成功ですね。

それは前回のデートの時、欲しそうに眺めていたヘアピンでした。星をモチーフにしその上に少しラメがのったもので、失礼ながらこういうところはやっぱり女の子なんだなーって思いました。

いやだってね、いつも日和子さんシンプル・イズ・ザ・ベストってところがあるんですよ。

そう思ったって仕方ないでしょ？

まあ、だからこそ時折見せる年相応のかわいらしさに胸がときめいてしまうんですけどね。

「どうでしたか？プレゼント」

「ええ……………とてもうれしいです」

顔を少し赤らめながらはにかむ日和子さん。

正直可愛いです。

「今つけてもいいですか？」

「ぜひとも！」

彼女は私の許可をもらうと体を背けてトイレのほうへ向かって行きました。

楽しみですねー。

あなたもそうですね？

~~~~~

「鷺介さん」

ぼんやりと星を眺めていると待ちに待っていた人から声かけられました。

ついに感動の御対面ですね。

俺は期待に胸を膨らませながら振り返りました。

「どすか？」

彼女は恥ずかしそうに俯きながら尋ねてきました。

そんなもの買ったときから答えは決まっていたましたが、俺はそんな日和子さんを見て彼女は抱きしめたいという衝動に駆られました。

「ほ、ほ、ほほほ………」

「ほ？」

「惚れ直すにも程がある！」

「えええっ」

俺は彼女を引き寄せて強く抱きしめました。

「すごく似合ってます」

「ほ、本当ですか？」

いつも凛々しさがにじみ出ている日和子さんですが、胸の中にいる彼女はヘアピンの影響もあり乙女な雰囲気が出ていました。なんともいえないかわいさです。

マーベラス。素晴らしい。

「えへへ、嬉しいです」

安心したように表情がフニャツと緩んでいる彼女もなかなかです。

「あつ……でも私、鷺介さんにあげるもの何もないです」

途端にシュンとなる日和子さん。

そんな彼女を見かねて俺は優しく声をかけます。

「いいんですよ、日和子さん。俺が好きでやったことですし。それに俺は日和子さんがいてくれるだけで満足ですし」

「ダメです。それでは私の気がおさまりません」

キッパリとそう口にする日和子さん。

やっぱり真面目というか、なんというか。

でも、そんなところが彼女のいいところなんだよなー。

「えーと、どうしようかな・・・・・・そうだ!」

悩んでいた日和子さんでいたが何か思いついたようで、俺から少し距離をとりました。

そして、周りを気にするように目を忙しそうに動かして、また顔を俺に向けました。

その瞳は何やら強い決意に満ちあふれたものでした。

「鷺介さん。目を閉じてくれませんか？」

「目、ですか？」

「はい」

「分かりました」

私は言われたとおりに目を閉じました。
彼女は何をするつもりなのでしょう。

チュッー

「へっ？」

「今日のお礼です」

そういうと彼女は逃げるように離れて行ってしまいました。

………今のはキスですね。

って、ええ！！嘘！？あの日和子さんが！？自分から！？

あのものすごく恥ずかしがり屋さんの日和子さんが自分からキスなんて！！

俺は高まった気持ちを落ち着かせるために夜空を見上げました。

暗闇の中で、星たちは私たちを祝福しているかのように光り輝いています。

きっと彦星様と織姫様も温かい眼差しを私たちに向けてくれていることでしょう。

いえ、そう願いたいところです。

俺はフツと髪を上を吹き上げました。

さて、落ち着いてきたようなので彼女を追いかけるとしますか。そんなことを考えていると、楽しそうな声が聞こえてきました。

「鷺介さん何してるんですかー。馬鹿じゃないですかー？」

「二度あることは三度ある！！」

お後がよろしいようで。

それではまた。

機会があれば。

(後書き)

輝 「本編を放っておいてこっちを書くとはな」

作 「短編小説は一度書いてみたかったしね。それにアニメも終わっちゃったことだったし」

輝 「そうだな」

作 「それでは、興味を持った方は不肖ワタクシ黒夜叉の『俺たちに翼はない』symphony』をお読みください!」

輝 「宣伝するなー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6833u/>

7月7日 ～千歳鷺介《ちとせしゅうすけ》編～

2011年10月7日15時04分発行